

す。幼児期は、前述のやうに自他の區別が明らかでありませんから、凡ての事が非現實的であり、青年期には現實を通過した主觀的のものが多くなつてまゐります。又幼児期は自他の區別がない處から、自我生活に於ても甚だ無差別であります、學齡期には自他の區別が甚しくなり、征服的、競争的生活が強くつゞき、青年期になりますと主觀に基いた相互的性質が著しくなつてまゐります。

青年期の訓育

この時期に於て、青年に充分なる自由を與ふることは必要な事であり、是と同時に相當なる監督を爲し、善良なる方面へ指導する事も、亦、必要であります。しかしながら、ごこまで自由をあたへ

ごこまで監督すべきかは實際にあたりもすこやかなかむづかしいことであり、指導者が青年の心的統一と云ふ事を重じ過ぎますと、新しい事の起る時期を失つて進歩をさまたげます。しかし監督について少しも顧みない時は、青年それ自身でさへも不可解な心理状態にあるのでありますから、どんな不都合な事が起るかも知れません。それで、指導者は、理解的の同情を以つて適當なる自由と監督との間に青年に接して行かなければなりません。自由ある監督、監督ある自由は青年を教育する場合に最も大切な心得と申さねばなりません。終りに望みまして、當問題の研究について御親切に御指導下さいました倉橋先生を初め、色々問題に對してお答へ下さいました皆様に對して深く感謝いたします。

横須賀港の沿革

我等、曩に横須賀軍港を見てその壯大なるに驚きしが、今回同港にて本年九月廿七八兩日に於て海軍工廠創立並に開港五十周年の祝典を舉行せしを機としてその沿革を調査することとせり。

抑々横須賀港は我國貿易場として出船入船の跡をたゞぬ横濱港が維新前一漁村たりしと同じく、亦僅かに十三の戸數を有する一漁村に過ぎざりき。然るに一度幕府が製鐵所(造船所)をこの地に設くるや次第に發達し、今日にては人口七萬三千を數ふる大都市をなしたり。横須賀人士がこの造船所のために盛宴を張りしも亦宜なりといふべし。

史を按するに、弘化嘉永以降外船頻りに來つて互市を促すや、幕府二百餘年の泰平の夢さめて、鎖國政策を一擲して大船製造の禁を解き航運を奨励し、歐

式海軍を創め、或は亞米利加、和蘭國へ軍艦製造を委託し、又は留學生を派遣する等各方面に施設する所ありしが、更に進んで一大船廠を江戸灣に創設せんとす。

これより先、幕府の造船所としては長崎製鐵所、江戸石川島の造船所の二ヶ所ありしのみ。それさへその規模極めて小さくして、實は修繕の用にも造船の用にも適せざれば、幕府はその船を上海に廻航せしめて修繕するの不便を感じ居たり。一大船廠創設の計畫はこゝに起れるなり。

(甲)幕末の横須賀

横須賀造船所設立の起原

この時に當り、小栗上野介勘定奉行を以て外國奉行をも兼ねしが慧眼夙に時勢を洞察し、極力異論

を排して造船所設立の議を決行せしめき。その議案の大體を示せば左の如し。

- a. 1. 肥後藩の上納の製鐵器械を收め、横濱に送輸せしむ。(元治年間)
2. 不足分を和蘭より購入す。
- b. 3. 軍艦役頭肥田濱五郎等の和蘭派遣。

佛國公使レオンロセス、目付栗本瀨兵衛等と親交あり。船廠、鐵工廠の海軍に必要なるを説き、佛國に依託せばロセス自ら責任を負ひて周旋すべきを諾す。

c. 勘定奉行兼外國奉行小栗上野介、目付栗本瀨兵衛等佛國公使と面接して商量を重ねし後、閣老水野和泉守、阿部豊後守、諏訪若狭守の連署を以て公式に佛公使ロセスに委託す。(元治元年十一月十日(二五二四))

右の外更に佛國提督ジョーライスの助言を得、佛國海軍大技士、フランソア、レオンヌ、ウエルニ

ーをこれが首長として傭聘せり。
かくて元治元年十一月、小栗、栗本並に軍艦奉行木下謹吾、佛國公使、提督及士官と共に、初め幕

府の豫選地たりし相州長浦に至りその地勢を點檢したるに意に満たざる點ありしかば、轉じてこれに隣せる横須賀灣を錘測して、その形勝佛國ツロン軍港に髣髴たるものありとて終にこの地を以て船廠設立地と決定せり。

慶應元年正月、幕府は公使及關係者一同と共に船廠設立の方案を議定し、小栗、栗本其他六人に製鐵所委員を命じ同年九月いよく鐵入式を行へり。

議定契約(慶應元年正月廿九日、閣老水野和泉守

參政酒井飛彈守、連署)

a. 條約要項

1. 製鐵所一ヶ所修船場大小二ヶ所、造船所三ヶ所、武器庫及役人職人の役所、共に四ヶ年にて落成の事。

2. 横須賀灣中製鐵所は佛國ツロン港の様式に倣ひ、凡そ横四五〇間、縦二〇〇間の地坪。

3. 製鐵、修船、造船三ヶ所設立費、總計、一ヶ年、六十萬弗、四ヶ年間合計、二百四十萬弗

b. ウエルニーの見込要點

1. 船廠より先に一工廠を横濱に立て、艦船修理に充つる事。

2. 佛國海軍を雇用して監督せしめ、邦人をして習學せしむる事。

3. 船廠をたつるため佛人四千名邦人二千名を要す。(入費二百四十萬圓)

かくして建設せられし船廠を當時横須賀製鐵所と命名せり。

慶應二年には官舎及工場の一部竣功せしを以て、七月より横須賀丸及十馬力船三隻の建造に着手せり。これ本工廠に於ける新造船の嚆矢なり。三年三月には第一船渠の開鑿を創め、五月技術傳習生養成の學校をはじめたり。一方にはかく事業進捗し居る間に他方にては幕府の頽勢は遂に支ふるに力なく、幾多の紛糾中に將軍慶喜は三年十月終に大政を奉還し王政復古となり、従つて本工廠は明治政府の管掌に歸したり。

(乙) 明治維新後に於ける横須賀

大政奉還後に於ける本廠は初め神奈川裁判所に屬せしが明治二年以降大藏省に屬し翌年更に民部省

の所屬となり、全十月には又もや工部省の所屬となり、翌年名を横須賀造船所と改稱せり。明治五年十月政府はこれを海軍省に轉屬せしめ、名稱も今日の如く海軍工廠と改稱しき。

明治初年に於ける本造船所の事業着々その歩を進め、汽船横濱丸、内海御召艦、蒼龍丸、第一第二利根川等十三隻の船及觀音崎、野島岬、品川城ヶ島の各燈臺等をつくれり。明治四年には第一船渠竣工したるを以て、有栖川熾仁親王の御臨場を仰ぎて盛大なる開渠式を行ひき。これ實に我が國船渠を有するの初なり。同年、佛艦シウブリス入渠し外國艦入渠の魁をなせり。この間に邦人の技術も漸く進み、技師、其他にもなるべく邦人を用ふるに至り佛人は漸次減じて明治十年頃には全く其跡を絶てり。

建造軍艦其他

明治五年より十六年までの製造は木造船のみなりき。其の九年に造られし軍艦清輝は我が國艦建造の嚆矢なり。十六年よりは世界の大勢に伴ひて我が國も鐵木兩用船をつくるに至り、更に十八年よ

りは鋼鐵使用の戦艦を造れり。第一に建造されしは八重山にして、次いで、橋立、秋津洲、須磨、明石、千早、新高、音羽、薩摩、鞍馬等をはじめ其他水雷艇も續々造られたり。

軍艦薩摩、鞍馬等の建造は實に我が造船歴史上劃期をなせしものにして、其大いさ、武備、速力に於て、先進國の同種類艦に比して優ることも劣らず、殊に起工後、薩摩は、十九ヶ月、鞍馬は十三ヶ月の短日月内にその進水をなしたるのみにても歐米諸國の等しく注目する所なりし也。而してこの一事は以て我が國造船術の進歩と横須賀造船所の設備の能力を世界に發表するの好機なりき。爾來邦人の建造せられたる艦艇は無慮百二十隻に及び、其他の汽艇、短艇に至りては枚擧に遑あらざるなり。而して、今や、三萬六百噸の戦艦山城の進水を見る。亦壯なりといふべし。

(丙)關係者小傳

目付、栗本瀬兵衛(鋤雲)

横須賀船廠創始の時、幕府と佛公使ロセス、佛提督ジョーライスの間に立ちて、交渉の任に當り、會

ては遣佛大使に従ひ佛國に渡航しナポレオン三世に謁見せしことあり。氏は又函館にありし時佛人メルメデカシユンに日本語を授け、後職を以て横濱にあり。カシユン氏も公使館書記官として同港にあり。公見の餘、屢々相互に舊事をのべて終に公使ロセスとも相識るに至れり。かゝる關係より幕府が造船所創設の際には擢て、目附として小栗上野介を助けしめたるなり。

小栗上野介忠順

小栗氏は徳川譜代の臣にして食祿三千五百石、駿河臺(佐々木病院所在地)に住し、父忠高は新潟奉行として令名ありき。

氏は文政十二年駿河臺に生れ通稱を又一といへりこの又一につき一場の物語あり。遠祖、家康に従ひ姉川合戦に出陣し一番槍をなせるより以後屢々この功名を得たり。家康呼んで「又一か」といふ。こゝに於てその名、一世に高く歴代相傳へて家門の榮譽を記念せり。

安政六年目付に任せられ、外國掛を命せられ、條約書交換の爲に遣米大使に従ひて渡來せしが、こ

れそもく外交に係はるの初なり。時に三十三歳。かくて機敏なる彼の才幹は穎脱して一行中に異彩を放てり。而して彼が開國進取の氣象はこの洋行に負ふところ少からざりき。歸朝後、外國奉行として勘定奉行としてその精勵は常人の企及する所にあらず、然れども其の剛直は往々人に忌まれ黜陟度々なりき。

氏は幕末紛糾財政困難なる間に立ちて俗論群議を排し、巨額の資を投じて横須賀造船廠を創始せしめ、又海國の前途を達觀し海軍の基礎をつくりしかば、製艦事業年々發達し彼の功勞は永世滅せざるの光を放てり。されど、その末路は甚だ悲惨にして、官軍に疑はれ、遂に斬罪に處せられき。時に、明治元年、年四十二歳なりき。

以上、大體に於て横須賀の歴史をのべたり。惟ふに、我が日本の如き四海環海の國土はその國

防上重要なるは海軍力にして、彼の明治の二大戦役をはじめ、近くは昨夏以來、帝國が同盟國と手を携へて獨逸の東洋に於ける勢力を覆滅し、東半球に彼が艦船の片影をも見ざるに至らしめたるは我が海軍の偉力ならざるなし。而してその海軍力の根源は實に本工廠の設立にあり。吾人はこゝに昔時の状態を回想し、帝國の光輝ある將來を祝福すると共に、當時その存亡すらもはかる可らざりし幕府が、而も財政困難の中において、造船所設立の議を容れ、巨額の資を投じて事業を起し、國家のために飽までこれをなし遂げ、以て我が國海軍の基礎を開きたる大なる功勞をおもひ、合せて本工廠創業の恩人、小栗、栗本をはじめ、一意十年の長き間、首長たるの名を全うせるウエルニ一の功績を思はずんばあらざるなり。